

## MASによる大学生の不安水準およびMPIとの関連 —近畿医療福祉大学福祉心理学科の学生を対象として—

柴原直樹

### Anxiety Levels in University Students Measured by MAS and its Relation to MPI — A Study with the Students Majoring in Psychology at Kinki Health Welfare University —

Naoki SHIBAHARA

#### Abstract

The purpose of this paper is to show the data on anxiety levels of junior students majoring in psychology at Kinki Health Welfare University by using MAS, to compare our data with those on different university students at different times, and to examine correlations of scores on anxiety measured by MAS with scores on two dimensions of personality, Neuroticism (N) and Extraversion-Introversion (E), measured by MPI. The present results showed that female students have a high anxiety level, whereas male students have an average level of anxiety, that average scores on anxiety are higher for our students than for other students tested previously, and that anxiety scores are highly correlated with scores on the dimensions of N and E.

Key words : MAS, MPI, extraversion, introversion, neuroticism

MAS、MPI、外向性、内向性、神経症的傾向

#### はじめに

誰にとっても不安は体験的に自明ではあるが、あらためて「不安とは何か」と問われればその答えに窮するであろう。不安の一般的な定義として、生田(1994)<sup>1)</sup>は「不快感と圧迫感を伴う安らかでない心身の状態であり、おおむね対象や動機を欠くが、漠然とした不確かさを伴い、特定できない何かに脅かされていると体験される」ことであると述べている。このような不安は、哲学において人間存

在の基本的条件として議論され、精神医学の領域では神経症の基礎的現象と見なされた(生田, 1994<sup>1)</sup>; 柴原, 2007<sup>2)</sup> 参照)。また、20世紀の中頃には、詩や音楽などにおいて不安の重要性が「不安の時代」といった劇的な形で表現されていたこともあった(Beck, 1976)<sup>3)</sup>。

他方、心理学では個人が抱く不安(身体的・精神的)で明確に意識されるものを測定し、その不安の程度を明らかにするための心理テストが Taylor (1953)<sup>4)</sup> によって考案され、

不安の客観的研究が始まった。このテストは MAS (Manifest Anxiety Scale) と呼ばれ、その信頼性・妥当性は幾多の研究により立証され、したがって多くの性格研究や臨床場面で利用されてきた。また、我国においても MAS の日本版が作成されパーソナリティ・テストの一つとして利用されている。

そこで、(1) 本学の福祉心理学科3年生を対象に顕在性不安を測定し、本学における学生相談等のための資料を提供すること、(2) その結果を過去のデータと比較検討し、合わせて MPI (Maudsley Personality Inventory) で測定された外向性尺度および神経症的傾向尺度との関連を調べることを本論文の目的とした。

## 方 法

**対象：**近畿医療福祉大学福祉心理学科3年生 68名 (男子40名、女子28名) が参加した。

**質問紙：**MAS (Manifest Anxiety Scale) 日本版と MPI (Maudsley Personality Inventory) 日本版を使用した。MAS は個人が有する種々の不安 (身体的・精神的) を包括的に測定し、その不安の程度を明らかにすることを目的としている (Hathaway, McKinley, Taylor, et al., 1968)<sup>5)</sup>。また、MPI は外向性と神経症的傾向という二つの性格特性を同時に測り、それぞれの尺度得点の組み合わせによって幾つかの性格像を描き出すことを目的としている (Eysenck, 1959)<sup>6)</sup>。

**実施方法と実施時期：**2008年4月から5月にかけて授業中にテストを行い、その場で検査用紙ならびに回答用紙を回収した。各学生に対し、まず MPI を最初に実施し、4週間後に MAS を実施した。また、MAS 終了後、最近不安を感じていることがあればその内容を記述させた。

## 結果と考察

MAS において無応答 (わからない) の数が 10以上、あるいは嘘構点 (Lie score) が 11以上ある 4名の被験者を除いた 64名の被験者 (男性 37名・女性 27名) のデータが分析の対象となった。なお、これら 64名の被験者の MPI における無応答 (?) の数は 20を超えなかった。

まず、MAS の平均値 (Mean) と標準偏差 (SD) を表 1 に示す。表 1 には阿部・高石および大村 (Hathaway, McKinley, Taylor, et al., 1968)<sup>5)</sup> より引用) のデータも比較のために含まれている。また、表 2 に五段階法による不安得点の段階基準を示す。この場合、I が高度の不安、II がかなり高い不安、III が標準段階の不安水準とみなされ、III 段階までなら通常域と判断される。

表 1 顕在性不安尺度の平均値 (Mean) と標準偏差 (SD) に関するデータ

MAS	本学 (2008)	阿部・高石 (1968)	大村 (1981)
	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)
男子大学生	22.7 (7.7)	17.8 (7.4)	20.9 (8.7)
女子大学生	27.3 (8.6)	17.8 (7.6)	22.6 (8.0)

表 2 MASにおける5段階法による得点段階基準

段 階	点 数 範 囲
I	27以上
II	23-26
III	14-22
IV	10-13
V	9以下

本学学生の場合、女性の不安得点の平均値は I 段階、男性の場合は II 段階と III 段階のほぼ境界上に位置していた。この結果から、本学女子学生は非常に不安度が高く、身体的あるいは精神的に何らかの問題を抱えている可能性が指摘される。また、男子学生の場合は

平均的かやや不安度が高いことが分かった。更に、年代別に見ると1968年から1981年の間に不安得点が男子で3.1、女子で4.8上昇している。今回の検査では1981年のデータと比べ男子で1.8、女子で4.7高い得点を示している。このような不安の量的な変化の背景に、不安の内容の質的な変化の可能性もあるのではないかと検討する必要がある。

一般に、大学生は一般成人に比べて不安状態が高く、強い対人緊張を感じない傾向がある(木下, 1990<sup>7)</sup> 参照)が、その理由の一つに就職への不安があるのかもしれない。実際、MASを使用した島田・寺崎(1993)<sup>8)</sup>の研究報告によると、企業に内定した文系、理系の学生の不安得点は10~12点代といった低い水準(IV段階)の間で変動しており、更に1986年から1991年までの6年間の間に不安水準の年代的变化は認められなかった。もしそうだとするならば、就職内定後に再び本学学生にMASを実施した場合、不安得点が低下するはずである。今後の検討課題である。

次に、MPIの結果を表3に示す。比較のためにモーズレイ性格検査手引(1964)<sup>9)</sup>に掲載されている日本人大学生の男女のデータを含めた。

L尺度とは虚偽発見尺度(Lie Scale)のことで、一般に社会的に望ましい(好ましい)行為と認められているが、実際には実行できそうにない質問項目に対し、自分を実際以上に良く見せようとして不正直に回答しているか

どうかを検出するための尺度である。このL尺度と同様に、MASにも質問に対する応答の妥当性を吟味するための配慮としてL得点(Lie Score)が設定されている。今回の検査結果から、MASのL得点(嘘構点)とMPIのL尺度の間に高い相関が認められた( $r = .515, p < .001$ )。

N尺度(神経症的傾向尺度)は情動の過敏性を示す傾向を測るもので、情緒不安定でストレスに弱く緊張して落ち着きのない性格特徴を示す人で高くなる。また、E尺度(外向性-内向性尺度)は、(1)関心が外に向いているか内に向いているか(2)社会的で開放的か孤独で引っ込み思案か、(3)動作や感情の表現が容易であるか内省的でためらいがちであるか、といった次元からその人の性格特性を測るための尺度である。本学の学生は、MPI研究会によるデータと比較して、N尺度において男子で2.42、女子で4.14高くなっているが、E尺度ではMPI研究会によるものと男女ともほとんど差が見られない。しかし、表4から分かるように本学学生のNおよびE得点の平均値は男女とも普通の範囲内にある。

Eysenck(1958)<sup>10)</sup>によれば、N尺度とE尺度は互いに独立した特性を測定するものであって、両者の間に相関がないといわれている。しかし、神経症患者などはやや高い負の相関を示すとの指摘もある(Eysenck, 1959<sup>6)</sup>参照)。本学の場合、N・E得点間の相関は男子

表3 本学および他大学(MPI研究会による資料)の学生におけるN・E・L各尺度の平均値(Mean)と標準偏差(SD)

MPI	N尺度	E尺度	L尺度
	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)
本学男子 (37名)	25.78 (11.90)	25.38 (12.23)	11.19 (4.78)
本学女子 (27名)	28.48 (10.42)	26.59 (9.18)	10.67 (4.86)
他大学男子 (418名)	23.36 (9.89)	25.45 (10.90)	13.86 (5.65)
他大学女子 (433名)	24.34 (10.11)	26.30 (10.36)	13.09 (5.50)

表4 MPI研究会(1969)\*による大学生集団から求められた段階点

N尺度		
段階点	得点範囲	意味
1	0~8	神経症的傾向はほとんどない
2	9~18	神経症的傾向は低い
3	19~28	普通
4	29~38	神経症的傾向がある
5	39~48	神経症的傾向が非常にある

  

E尺度		
段階点	得点範囲	意味
1	0~9	非常に内向的
2	10~20	やや内向的
3	21~31	普通
4	32~41	やや外向的
5	42~48	非常に外向的

\* MPI研究会編：新・性格検査法—モーズレイ性格検査—。誠信書房，1969

学生で有意でなかった ( $r = -.228, p > .05$ ) が、女子学生で有意であった ( $r = -.472, p < .05$ )。

更に、本学学生の MAS と N 得点および E 得点との相関を調べてみると、表 5 に示すように N 得点と有意な正の相関 ( $r = .725, p < .01$ )、E 得点と有意な負の相関 ( $r = -.258, p < .05$ ) があることが分かった。MPI 研究会発行の資料と合わせて考えると、不安は神経症傾向と内向性とが組み合わさったものであることが示唆される。

以上、本学福祉心理学科 3 年生を対象にした検査の結果から、(1) 男子学生は平均的もしくはやや高い不安水準にあるが、女子学

表5 本学学生および MPI 研究会(1969)による日米の大学生における MAS と N・E 得点間の相関

被験者群	人数	相 関	
		N	E
本学大学生	64名	.73	-.26
日本大学生	176名	.74	-.45
米国大学生	254名	.77	-.35

生の場合は非常に高い水準にある、(2) 神経症的傾向尺度と外向-内向性尺度の平均値は男女とも普通の段階にある、(3) 女子学生の場合、内向的性格であるほど神経症的傾向が高いことが分かった。しかし、調査対象の数が少ないことを考慮した上で、これらの分析結果を解釈する必要があると思われる。

最後に、MAS における不安得点が 27 以上 (I 段階) ある学生の不安の内容を調べてみると、サークル活動や友人関係、就職や国家試験といった大学生活や将来に対する不安が多かった。いずれにせよ、この検査による高不安の学生に対しては、更に進んでその不安の種類や原因を詳しく追究するための診断を行い、不安除去のための具体的対策を講ずる必要があると思われる。

## 参考文献

1. 生田孝：精神病理学による不安の理解。清水將之編，不安の臨床，p21-34，金剛出版，1994
2. 柴原直樹：対人恐怖の精神力動。近畿福祉大学紀要第 8 巻 1 号，43-51，2007
3. Beck, A. T.: Cognitive therapy and the emotional disorders. Mark Paterson and International Universities Press. 1976
4. Taylor, J. A.: A personality scale of manifest anxiety. Journal of Abnormal Social Psychology, 48, 1953
5. Hathaway, S. R., McKinley, J. C., Taylor, J. A., 阿部満洲，高石昇：顕在性不安検査使用手引。三京房，1968
6. Eysenck, H. J.: Manual of Maudsley Personality Inventory. London: Univ. London Press, 1959
7. 木下功：MAS による中年期の不安について—青年期との比較。神戸大学医療技術短期大学部紀要 第 6 巻，213-217，1990

8. 島田修・寺崎正治：顕在性不安尺度（Manifest Anxiety Scale）による大学生の不安構造について．川崎医療福祉学会誌，Vol.3, No.1, 111-117, 1993
9. MPI研究会（訳編）：モーズレイ性格検査手引．誠信書房，1964
10. Eysenck, H. J.: A short questionnaire for the measurement of two dimensions of personality. *Journal of Applied Psychology*, 42, 14-17, 1958